

笠原紀久恵の教育実践記録の研究(1-2)

——『友がいて ぼくがある——学びあい、
育ちあう40人の学級物語』の検討——

広瀬 信

An Inquiry into the Documentary Literature of Educational
Practice by KASAHARA Kikue (1-2)

——An Inquiry into *Tomo Ga Ite Boku Ga Aru*——

Shin HIROSE

E-mail : hirose@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：教育実践記録 教育実践研究

keywords : documentary literature of educational practice, study of educational practice

はじめに

(3) 5年生2学期からの子どもたちの成長

1. 笠原実践の概要と特徴

- (1) 『友がいて ぼくがある』の概要
- (2) 教育信条・教育姿勢・教育目標
- (3) 教育方法

- 1) 生活綴方教育の方法
- 2) 学級集団づくりの方法

2. 笠原実践の分析

- (1) 5年当初の学級集団づくり
 - 1) からだ(体験)で知る子に
 - 2) 運動会を節に
 - 3) さかあがりへの挑戦
- (2) 正夫の転入と受け入れ
 - 1) 最初の出会いを大切に
 - 2) 裸のつき合い：マラソン
 - 3) 放課後の家庭訪問
 - 4) 正夫の学校での様子

(以上、前号)

1) 障害児のミキちゃんの手拍子

夏休み明け、生活リズムの回復のため「ピリッと
した時をもとう」と呼びかけたところ、子どもたち
は、「朝、徹底的に歌いこもう」(68-69頁)と応え
た。

ある朝、校庭のまん頭山で、みんなで「若木の歌」
を、「青空にひびけ」とばかり歌っていたところ、
「ことばの教室」(言語治療教室)の窓から、一人の
小さい女の子が顔を出し、パチパチと手をたたきは
じめた。その時は、みんなそのことの意味を理解し
ていなかったが、昼休み、ことばの教室担当の高木
先生が、笠原に、「先生、大変なことがあった！」
と話しかけてきた。高木先生によると、その女の子
はミキちゃんという名前で、生まれたときから脳に
障害があって、これまで音に対しては全く反応を示
したことがない子だという。それが、今日、外から
5年1組の歌声が聞こえてきたら、急に窓の所にか
けよって手拍子を取り始めたのだそうだ。

この話を聞いた笠原は、高木先生にその日の6
時間目に5年1組に来てもらって、ミキちゃん
の話をしてもらうことにした。クラスの子どもたち
の中に、障害者の真似をして遊ぶ子がいて、指導が必
要だと考え、その機会をうかがっていたところだっ

た(70-72頁)。

高木先生は、ミキちゃんの障害について、その日の朝の出来事の意味について、人間の発達と言葉について、分かりやすく説明してくれた。ミキちゃんの描いた絵を見せて、音は聞き分けられないけれど、絵はこんなに細かい表現ができること、言葉をしゃべらないけど、心の中には、いっぱい思いをもって、目はしっかりものをとらえていることを教えてくれた(72-74頁)。

高木先生が帰った後も教室は深い感動に包まれており、笠原はこの感動をすぐに特活ノートに綴らせた。藤田まどかは、以前にコンサートに行った時、となりに障害者がいて、「いやだ」と思って離れたことを告白し、「本当に悪いことをしたなと思います。ミキちゃんの話を書いた時、私は外からだけ見て、『あの人がかみみたい』と思っていたことがはずかしい。今、心をなおした」と書いた(76頁)。

直接記録されていないが、高木先生の後に笠原も特殊学級の子どものことや、障害者とのキャンプの話などをしていることが、子どもの文章から分かる。

八島健太郎は、笠原が以前子どもたちに配った障害者の詩(毎月配っている3号目の詩)のことを思い起こしながら、「ぼくは思った。特学の人を決してバカなんかじゃあない。生まれる時に病気になんかならなかつたら、人からバカになんかされていない。それに怠けてなったんじゃあない。なりたくてなったんじゃあない。病気のせいだ。……ぼくは今まで、ぜんぜんといっていくくらい本当の学習はしていなかったな。きっとミキちゃんたちは勉強したいだろうなあ。したいといえないけどしたいだろうなあ。ぼくはきょう思ったんだ。ぼくは、この人たちのためにも、もっともっと勉強して、大人になったら学者になって、このような人たちの障害をなおす薬や、機械を作って力になりたい。……クリスマス会なんか、ミキちゃんを呼んでいっしょに歌いたい」と書いている(76頁)。

岩隈謙は、「今日先生の話を知ったら、いっぱい感じた。生まれかわったみたいな気がする。ぼくの心にすごくすごくひびいてきた。身体の障害、心の障害があり、心に障害を持っている人がキャンプで心がとけていく話も、ぼくの心をうった。ぼくは、『人間』の話を知っているようでした」と書いている(77-78頁)。

この日は一言も感想を言わなかったが、「ミキちゃん

んとのお会いを深く心に刻んだ子」がいた。木戸崇子は、数日後、お母さんと、「障害をもつ人と共に創るコンサート」に参加し、「ほんとうにみんな同じ空の下で生きている」という、ノート6頁にわたる日記を書いた。笠原は、「それは崇子自身に対しての“自己確立宣言”であったし、クラスの仲間に対して、『みんなのために自分を生かす』と公約した時でもあった」と評している(81-83頁)。

もともと崇子は、「まじめだが、目立たない子」で、「秀でた力」を持っていたが、「自分から進んでその力を人前に出そうとはしな」い子だった。「お母さん、子どもを大きく育てましょうね。じっくり見守ってやってください」という笠原の呼びかけに答えて、崇子のお母さんは、それまで時間をかけて見守っていた(80-81頁)。その崇子に転機が訪れたのであった。

障害者のグループの歌に感動し、その歌が、「『わたしの代わりに歩ける人は思う存分歩いてほしい／わたしの代わりに話せる人は、おもう存分話してほしい』とわたしの胸に訴えてきた。じいっと聞きながら、『この人たちの代わりに、わたしは歩いたり話したりしたい』と心の中でくり返していました」と書いた木戸崇子は、前にも増してマラソンの練習に取り組み、秋のマラソン大会で優勝した。「マラソンで、すっかり自信をつけた崇子は、目に見えて積極的になって」、「学級の仲間の全面的なバックアップ」を受けて児童会書記に立候補し、立会演説会で「今までの自分を語り、その自分がみんなに役立つと思った“わたぼうしコンサート”“ミキちゃんとの出会い”を語り、当選した。その後も、6年前期児童会書記長、6年後期児童会副会長として活躍する。マラソンも5、6年と2連勝した。笠原は、「子どもが自ら変わりたいと意識した時、大きな成長があることを教えられた」と述べている(82-85頁)が、この年頃の子どもは、何かのきっかけで大きく成長することがあることを知った上で、親とともに「じっくり見守って」いたのであった。

この取り組みのポイントは、障害者の真似をして遊ぶ子がいて、指導が必要だと考え、その機会をうかがっていた笠原が、ミキちゃんとの出会いをまさに指導のチャンスだと捉えて、高木先生にも来ていただいて障害者理解を深める話を聞かせ、子どもたちの生き方に大きな影響を与えることに成功したこと、一般化すれば、「時宜にかなった効果的な指導」

である。

その日は一言も感想を言わなかったが、数日後、「障害をもつ人と共に創るコンサート」に参加し、大きく生き方を変えた崇子のような子もいた。「秀でた力」を持っていたが、「自分から進んでその力を人前に出そうとはしな」い崇子を、お母さんに呼びかけて、いっしょにじっくり見守っていた笠原だったが、その崇子が飛躍するきっかけにもなったのである。このように、笠原が、子どもの特徴や子育てについて、親と心を開いて話し合い、考え方を共有できる関係が築けていた点にも注目しておきたい。

2) 正夫はいじめられていた

秋になり、正夫の靴が、毎日のように隠されるようになった。みんなで探すと、ごみ箱の中や水たまりの中から見つかった。みんなで見張ったりもしたが、犯人は見つからなかった(85-88頁)。

「どうして、こんなことがおこるのか、どうすればいいのか」、書記局の慎一郎の提案を受けて、学級会で時間をかけて話しあうことになった。その中で、学級外では、正夫がツバをかけられたり、足をかけて転ばされたり、汚いから寄るな、くせえと言われたりしていたことなどが明らかになった。しかも、そのような事実を知りながら、多くのクラスメートは、怒りをぶつけることもなく、傍観者であったことに笠原はショックを受けた(89-91頁)。

クラスの中にも、正夫を誕生日に呼びたがらないなど、正夫を避ける子がいることが明らかになり、「いづらいいんだけど松本くん、顔あらってこないしょ。そして風呂もはいんないから汚いっていわれると思う。顔ぐらい洗ったら」という発言も出た。笠原は「話しあいをじっと見守っていた」が、このまま話しあっても、正夫の成長にも、学級集団の成長にもつながらないと判断して、討論をいったんストップさせ、傍観者である子どもたちに、「差別」の問題を内面化させるため、「今、心の中で思っていることや、よく考えたら自分の心に、松本くんの問題が前にはあったなあというようなことがあったら書いてごらん」と、特活ノートに書かせた(92-94頁)。

再開した学級会では、子どもたちは、「自分をみつめながら語りはじめた。」勉強ができなくてばかにされたくやしい思い、ぐずいといじめられた経験、太っているとばかにされた経験を話し、「松本くん

のくやしさがわかる」と語った。逆に、自分がいじめた経験も語られ、自分の心の貧しさを恥じて、泣き出す子どももいた(94-96頁)。

話しあいを通じて明らかになったのは、「いじめの対象とされているのは、<身なりのきたない人、デブや小さいという身体つき、ぐずのろまという動作によるもの、勉強ができない、身体の不自由な人>が選ばれているということと、<自分はそうは思っていないんだけど、みんなが言ったから>とかくもし言わなかったら自分も仲間はずれにされると思った>とか、みんなも言ったというわけで、責任感も心の痛みもその時は全く感じていなかったということだった」と笠原はまとめている。そしてもう一つの発見は、「それがいけないことだとわかったのは、相手がないてしまったり、誰かにおこられてではなく、自分が同じようにいわれ心を痛めた時とか、日記を書いたり人の体験をきいて心の中にその時のようすが浮かんできた時や、いじめた人から逆にやさしくされた時だった。いずれも自分の問題としてとらえた時だった」と述べている(97頁)。

いつになく深まった学級会だったが、この問題を最初に提案した慎一郎が、「みんなは、松本の気持ちわかるというけど、わかっただけでは、この問題は終わらない」、全校の問題として児童会に問題提起をしないといけないと発言した。笠原も賛成したが、「まだ、それではすまない」という表情の明子が、笠原と目があうと、意を決したように、「心のどこかで」正夫を「ちょっとバカにするみたい気持ちも本当はあるんです。それはさ、正夫くんが汚くしているのもあるけど、勉強できないからじゃないか」、「だから思うんだけどさ、松本くんにも、みんなで字を教えていこう。松本くんが自分から言える力をつけるために」と発言した。笠原は、明子の発言を、「外から守るだけでは解決にならない。どこへ行ってもひとりの時だって、自分から要求している力をつけていくためにも、学力をつけていこう」と正夫の学力問題を提起した」ものと見ている(97-99頁)。正夫はまだひらがなも満足に書けなかったのであり、正夫を自立させていくためには、基礎的生活力の形成とともに、どうしても克服させなければならない課題と笠原も見えていた。

笠原は、「この学級会から生まれたものは多かった。誰もが正夫とむかいあったばかりでなく、自分達の基礎的生活力の問題や学力についても考え、自

分の心もみつめていった。また学級会とは何かも考えることができた」と総括している。

松岡徹也は次のような詩を書いた(102頁)。

学級会

慎ちゃんが心のままを語った。
工藤も伊藤も山下も
遠藤や小野も
心のままを語った。
おれはみんなを信じて
思っていたことをそのままだした。
目に涙をためて言った。
涙を流して語った人
じっとみつめていた人
うつむいていた人
いろいろいたけれど
おれは本気だったよ。
だって自分の学級だもんな。

松岡徹也は、6年生になって、「みんなの問題をこそ話しあって、楽しくすごせる学校にする」と訴えて児童会長に当選している。

この学級会では一言も発言しなかった内気な下司智久は次のような詩を書いた(103頁)。

勇気がほしい

慎一郎くんが提案の学級会
すごいなあ。
勇気があるなあ。
みんな自分の昔を語ってくれた。
ぼくの知らないところで
いろんなことがおこっているなあ。
みんなの話をききながら、
ぼくは音をたてないように、
そうっと涙をふいた。
ぼくにも勇気があればなあ。
どんなに気持ちがいいだろうか。
勇気がほしいなあ。

笠原は、「ひとことも発言しない子だって問題をしっかりとらえながら、心の中で葛藤している。そして自分の課題をとらえているのだ」と押さえ、

「智久の勇気はどこで出てくるかなあ」と見守っている。

後に智久のお母さんから彼の成長を振り返る次のような手紙が寄せられている(104-105頁)。

息子は、東小は三度目の小学校です。……元来内気で、気の弱い所があり、転校の時には、いつもそれが一番の心配でした。でも、転校のその日に、クラスのお友達と一緒に帰宅。親子で大よろこびしました。それから先生のはげましで、日記も続くようになり、内気な息子も自分の思いを、学級物語『大地』で、みんなにわかってもらい、又誕生会では、「切り絵」や、クラス全員のお祝いの言葉で、自分が認められるよろこびを知ったようです。……認められることで、はりができて来たようですし、心をゆさぶられるような体験も何どかしているうちに、いつのまにか、班長や委員までやるようになっていました。友だちと行動することの楽しさと、厳しさをわかって成長してほしいと願っています。

最近、智久の固いつぼみが、少しずつふくらんできているようです。

笠原は、『『心をゆさぶられ』『そっと涙をふいた』学級会は、智久の出発点にもなった』と述べている(105頁)。内気な子どもも、「みんなにわかってもらい、……認められる」、つまり受容されることで、自信がつき、みんなのために自分も何かやりたいと、班長や委員までやるように成長していったのである。このように、笠原は非常にきめ細かく一人ひとりの子どもに目配りをし、その成長を見守っている。

この学級会の取り組みのポイントは、子どもからの提案で学級会が開催されたこと、しかし、傍観者的立場での話し合いに終始したので、学級会の運営を子どもたちに委ねていた笠原が介入して、学級会を一度中断し、正夫へのいじめ問題を自分の問題として考えさせるために、特活ノートに書かせたこと、そのことで、再開後の学級会で深い話し合いができ、いじめが差別と結びついていることの理解が深まり、正夫のくやしい思いへの共感が広がっていったこと、それに対して、正夫の気持ちを「わかっただけでは、この問題は終わらない」、児童会に提案して、いじめをやめさせなければならないという慎一郎の提案があったこと、さらに、正夫がいじめられる原因を

なくすために、「自分から言える力をつけるために」、正夫に「みんなで字を教えていこう」と明子が提案したことで、正夫に基礎学力をつける取り組みにつながったことである。

また、学級会で、みんながつぎつぎに自分の思いを真剣に話し、それをみんなが聞くことで、仲間に対する思いが深まり、クラスの中に、「自分の学級だ」という意識が強められ、学級集団の結びつきがさらに強まっていったことが重要である。一言も発言しなかった内気な智久のような子どもも、学級会の話し合いに「心をゆさぶられ」、自分にも「勇気がほしい」と自己変革への思いを詩に書き、その後、「みんなにわかってもらい、……認められる」体験を積み重ねることで自信をつけ、班長や委員までやるように成長していったのである。

子どもによって変化のスピードは違うが、この学級会は確実に子どもたちを変える転機になったのである。一人ひとり違う子どもたちをていねいにフォローしている笠原の教育姿勢も確認しておきたい。

3) 正夫に基礎学力をつける取り組み

学級会后、正夫に基礎学力をつける取り組みが始まり、班長会にさらに何人かが加わって小先生となり、放課後、ひらがな、九九、簡単なかけ算の個別指導が始まった。正夫以外にも九九があやふやな者がいたので、全員で九九の練習をすることもあった。正夫は、黒板の字を書き写せるようになり、毎日家でも練習して、「赤ペンちょうだい」と朝一番に笠原のところにとびこんでくるようになった(105-106頁)。

正夫に基礎学力の個別指導をしていた子どもたちは、放課後もいっしょに遊んだりする気の合う集団になっていき、その中から“正夫をふろに入れる会”が生まれ、銭湯を経営している智子の家のふろにみんなで行くという取り組みも生まれた(108-111頁)。

正夫がひらがなを覚えて初めて書いた日記は、「たまあにうちですぐぐわいはるくなるときがあてそのときわぼくわしんばいでたまりません」と母親の病気を心配するものであった。笠原は、まだ間違いも多い正夫の日記を『大地』にのせて子どもたちに読んでやった。子どもたちは、「母さんは病気か」「松本はやさしいんだな」「がんばれよ」と正夫に言った。子どもたちは、秋の見学旅行の昼食時、

みんながお母さん自慢の豪華弁当を広げている中で、正夫が自分で作った、のりのついていない大きめのおにぎりを新聞紙から取り出し、食べ始めたことを、あれはお母さんが病気だったからなのかと思ひ浮かべていた(111-114頁)。

ひらがなを覚えた正夫は、カタカナや漢字の練習も始めた。教える小先生の側も、真剣に練習する正夫の姿に刺激を受けるようになった。教わっていたのは正夫だけでなく、いくつかのグループが生まれていた(114-120頁)。

「先生、字おぼえたら何か楽しいね」と言って、正夫が朝の会や学級会で自己主張を始めた。そして原稿用紙4枚分の次のような日記を書いた(122-123頁)。

ぼくは字をおぼえた

……じおおしえてもらったとき、じていいもんだな。とくだなどおもた。……くやしかたことお日記にかことしてもかけなかつけど、いまわじおおぼえたらくやしことやたのしことも日記にかいてすとする。

たんじょうびになたらみんなにカードおかいてやた。そしたらよろこんで松本ありがといてくれたときわとてもとてもうれしかた。……自分もみんなのことにやくにたつとおもたときわうれしいと心ろでおもた。

そして本およんでこたえられるようにぼくがなてみんなにばかにされないうれしです。先生がだす詩もいまわみんなよりさきにおぼえてろどくできてぼくは「松本すごいんでしょ」とともだちができたことがうれしくてうれしかた。なんだか自分のまわりがひろがてきたかんじでうれしです。ぼくわじしんついてきました。

「くやしいことや楽しいことを書けるようになってすとする」「友達に誕生日カードも書け、ありがとうとってもらえる」「みんなの役に立ててうれしい」「本を読んで答えられるようになった」「詩も朗読できる」「自分のまわりが広がった」「自信がついてきた」、5年生になって初めて字を覚えた喜びの叫びである。それまで字が書けず、くやしい思いをしてきた正夫だからわかる、字を書けることの意味と喜びである。笠原は、「正夫がはじめて知っ

た学問のよろこびであり、自信であった」と述べている(123頁)が、人とつながったり、人の役に立てたりする喜びでもあった。

文字を獲得した正夫には、やさしさが見られるようになった。日記にくやしいことや楽しいことを書けるようになり、またそれを読んでもらって、自分の気持ちを理解してもらえるようになったからである。正夫にとっての生活綴方教育の始まりといえる。それまで書いて自己表現し、それを読んでもらって、自分を理解(受容)してもらおう経験がなかった正夫にとって初めての体験であるだけに、そのことの持つ人格形成的意義もより大きかったのであろう。

正夫は、笠原の赤ペンのよる励ましが読みたくて、また、友たちが自分の日記を読んで、気持ちを知ってくれるのがうれしくて、代理の日記(提出している日に家で書くノート)まで用意して日記を書くようになった(136頁)。

また、字が書けるようになり、自信が付いたことで、それ以前にはなかった積極性と大らかさが見られるようになっていった(123-124頁)。みんなに一方的に支えてもらう関係から、より対等な関係に一步踏み出したのである。

12月3日、正夫が11歳になった。朝の会で正夫の誕生会が行われ、班長たちからのよびかけのスピーチとみんなの歌で祝われた(134-135頁)。その時のことを智子は、次のように書いている。

「十二月三日」

「ピッカピカの晴れだ」

班長たちのよびかけが始まった。

今日は、松本くんのたん生日である。松本くんは黒板の前に出てうれしそうである。涙を流しそうな目。ほんとうにうれしかったのだろう。よびかけをしているのは、班長の宮武さんはじめ木戸、大嶋、飯島、松岡、二瓶、細越、中出、阿部、私。それに兄弟班の藤井、藤田、工藤、外川、鍵谷。

私なんか、お風呂に入れてあげたことぐらいしか松本くんに対してはしてはいない。みんなに祝われて幸せそうな松本くんを見て、何もしてあげなかったなどふと思う。

「ハッピーバースディ松本」「若木の歌」「山の音楽家」を歌った。この歌声は、朝の歌よりひびいていたと思う。

もう松本くんも十一歳だ。わたしはうたいなが

ら思っていた。みんなも、私も、松本くんに学ぶことはたくさんあるような気がする。七月にみんなに祝ってもらった私は、松本くんのおねえさん。がんばらなくちゃあ。(136頁)

クラスのみんなから祝福される誕生会が持つ受容体験としての意味には大きいものがあると思われる。受容体験をあまり持っていなかった正夫は、誕生会の持つ意味をとりわけ重く受けとめたようである。「全員のスピーチだけでも四十分はかかりはじめていたから、誕生会の時間を捻出するのは正直大変だった」ため、6年になってからのある日、「今日は、誕生会できない」と笠原が言った時、子どもたちの多くはしかたがないと思ったようだったが、正夫は、「まっちゃん、これでいいと思うか。先生に言いにいくべ。熊谷の十二歳は、きょうしかないんだぞ。みんなは、四十人の中の一人と思ってるかもしれないけど、熊谷は、きょうは主役だと思ってきているんだぞ。まっちゃん学級委員だべ。なんとかしれ」とはたらきかけていたという(183-184頁)。

正夫の成長や、クラスの子どもの正夫に対する認識の変化の背景には、笠原の地道な努力があった。「学級集団の中で正夫のことを真剣に考え討論を重ね」、そこから子どもたちの行動が生まれた。笠原は、「それらのことを『大地』に書き、それを読んでまた考えさせた」。子どもたちは、「仲間の文を読みながら、自分の思いを確かめたり、修正し、正夫に対する認識を深めた」のであり、笠原は「赤ペンで語りかけ」て、それを促した。そのような地道な積み重ねが正夫を成長させ、クラスの子どもの正夫に対する認識を変化させたのである。そしてその取り組みの中で、「仲間を見る暖かいまざしの子どもが、かげになり日向になりして正夫の心を温めていったこと」が大きかった、「友のいたみを自分のいたみにできる子」「友のよろこびに心からの祝福をおくれる子」である智子²⁸⁾の存在が大きかったと笠原は述べている(136頁)。

成長したのは正夫だけではなかった。5年の初めに提起された「この一年間で、一つはなろうチャンピオン」という目標にこたえて、子どもたちはそれぞれに自分なりのチャンピオンを目ざした。朗読チャンピオンになった美佐子は、ミキちゃんとの出会い、崇子の成長を見つめながら、身障者センターを見学し、「声の図書館」の朗読ボランティアに参加しだ

した。このことが、後に、卒業制作として、在宅訪問児童学校の子どもたちのために、クラス全員で“あいうえお読本”を作る取り組みに発展した(137頁)。

(4) 6年生になってからの子どもたちの成長

1) 6年生の学級びらき

5年生の1年間に、祝賀会やお楽しみ会を計画・運営する経験を積み重ねてきていたリーダーたちが準備した、6年生の学級びらきは、ドラムマーチで開会し、歌、朗読、呼びかけ、一人ひとりの6年生になっての決意表明へと続いた。最後は、次のような呼びかけで締めくくられた(138-141頁)。

みんな！わたしたちは、六年生らしく、でっかく
 どうどうと進んで行こう

ひびきあおう

学びあおう

いっしょにいるから仲間なんじゃあない。いっしょ
 に生きるから仲間なんだ

さあ歌おう、私たちの歌を

(若木の歌の合唱、ドラムマーチの締め)

この日、笠原は、『大地』に、子どもたち一人ひとりの決意と、それに対する笠原の思いを書いて、「お父さんお母さん、力を貸してください。子ども達に確かな力をつけるために、今年もまた共にがんばりたいです」と結んでいる。笠原は、「子どもの表情、行動、何げないことば、毎日提出される日記から、子どもの声を聞きとろうと」していたが、「その中には、親と共に考えていかなければならぬことがたくさんある」「人の外側に表れたことだけで人間を評価したりきめつけたりしがちな子ども達のあり方も、親達と共にしっかり考えていこう。そのためにも、さまざまな子どもの願いや心のゆれを、参観日や懇談会、学級通信の中で具体的に出しながら共にみつめていきたい」と思っていた(141, 144頁)。子どもの姿を親に伝えながら、子どもの問題を一緒に考えていこうというのが、笠原の姿勢である。

2) いたわりの“甘い目”から、同等の“きびしい目”へ

笠原は、6年生になって、正夫への接し方を変え

た。「いたわりの“甘い目”から、同等の“きびしい目”へ」の転換である。5年生の7月の転入直後は、毎日学校に来させることをまず優先するため、学用品を貸し与えたりして不安を取り除くとともに、スポーツの才能を引き出して自信をつけさせたり、小さなことでも頑張りをはめたりしていた。しかし、それだけでは正夫を成長させることはできないと、6年生になって母親に会い、サッカー同好会への入部を勧めた。スポーツで自信を持たせるとともに、「放課後の生活を集団の訓練の中におく」というねらいがあった。日常的にも、「いいかげんさや、でたらめ」をみんなの中で正し、厳しく接するようになった。しかし、子どもたちの中には、「正夫としてはよくやっている」などの同情的意識が残っていた(144-145頁)。

5年生の初めから毎月課していた、詩の朗唱テストで、正夫が、最後の行で一カ所言いよどんだことがあった。笠原が、「もう一回練習してから聞いてあげる」と合格を認めなかったところ、「先生は正夫さんに厳しすぎる」と日記に書いてきた子がいた。それに対して、笠原は、「あなたの気持ちが嬉しいです。あなたが、正夫がすらすら朗唱している時、自分のことのようにニコニコして、一緒に小さく口ずさみ、胸をなでおろしていたのも、いいよんだ時、ハッとして心配気に見守っていたのも知っています。正夫の努力をずうっとみつめ、本気で理解してくれているのも、知っている。でも、あの正夫がいい終わったあとのパラパラと起こった拍手に、あなたは、みんなからの合格のひびきを聞いたろうか。聞いていないと思う。“正夫だからいい”“自分たちとはちがう”というひびきでしかなかったと思う。正夫だって、本気でやった！とは思えなかったはず。わたしは、努力して努力してがんばりぬいて、どうどうといい終わり、完璧な合格をみんなの前で美春や進一や正夫にはさせたかった。そして“ぼくだってやれる。堂々の合格だ”という自信を持つことが、みんなと一緒にだということではないのだろうか。正夫にはそれをやり切る力は育ってきているのです」と赤ペンを入れた。正夫の成長のために、正夫をみんなと同等に扱おうとする笠原の姿勢を示すとともに、“正夫だからいい”という見方を払拭するようにというメッセージをクラスに送ろうとしたのだ。おそらく、このやりとりは『大地』でみんなにも紹介されたと思われる。正夫は2日後に、一

字一句もまちがえずに朗唱し、割れるような拍手をもらっている(146-147頁)。

しかし、それでもなお、「あんまりほめてもらえない。松本くんならきっとほめられたのに」と日記に書く子もいた。笠原は、これでは正夫の「真剣な歩みもしっかりととらえること」はできないと考え、「子どもたち一人ひとりのがんばりの事実を、みんなの前にもっとくっきりさせていこう」と考えた(148頁)。

正夫は何にでも興味を持つようになり、他の子が笠原から「切り絵」を教えてもらっているのを見て、「ぼくもやりたい」と寄ってきて、やがて熱中するようになった。班の仲間のはげましでカタカナを覚えると、「わすれたらこまるからカタカナで日記書く」と言って、カタカナ日記を始めた(148-150頁)。

笠原がこのカタカナ日記を『大地』で紹介すると、優介が、「ぼくは本が好きだし、たくさん本も読む。松本くんよりテストもいい。でも、どっちかというところ、頭で考えてわかっているだけで、いざとなるとおろおろするぼくにくらべて、ようやくカタカナが書けるようになった松本くんの方が堂々としている。それは、松本くんが、すぐ生活と結びつけて覚え、自分のものにする学習をしているからのようだ。ぼくも、そこを松本くんにまなばなくてはならない」と日記に書いた。「ぐんぐん力を伸ばしていく正夫の姿をしっかりとりえながら、自分の生き方を問いなおして」いくことのできる子どもが現れてきたのだ(151頁)。

この後、優介はローマ字日記を始め、短歌日記を書く子も現れた。正夫がクラスの仲間に影響を与え始めたのだ。笠原は、「これは、正夫式学習だ。学習が生きて来た。正夫がみんなに教えたことの一つだ」と紹介した(151頁)。

母の日に、色紙に切り絵を貼って、それに詩をそえて贈ることになった。正夫は、2枚作って、1枚を、お世話になっている松岡徹也のお母さんにプレゼントした。正夫のやさしさもみんなに伝わるようになった(152-153頁)。

笠原が、正夫の姿をクラスのみみんなにしっかり伝えていくことで、子どもたちは正夫を対等の仲間と見るようになっていった。

春の遠足は往復16キロの王子水源池だった。保体部、生活部、学級音楽部が案をねり、学級会に提案し、一部修正されて決定された子どもたち企画の

行事であった。班毎の探検、自由遊び、歌、ゲーム、リレー、騎馬戦等々、「笑い声がいっまでも林にこだましていた」。居合わせた中学の先生も「これ、子ども独自の計画ですか」と驚いていたという(154頁)。ここには、笠原の学級集団づくり、子どもたちの自治的、文化的能力の育成の成果が見られる。

正夫は、古い手提げ袋に、おにぎりと、コーラのホームサイズのびんに水を詰めて水筒かわりに持って来た。もうはずかしがることなく、その水を豪快に飲んだ。子どもたちには堂々とした正夫が逞しく見えた。もう正夫のことを、「かわいそう」とは言わなくなった(155頁)。

みんな歌は好きだったが、笛が苦手な子がいたので、5月の目標に〈みんなできれいな演奏をする〉を取り入れ、音楽リーダー(小先生)の指導の下、みんなで笛の練習に取り組んだ。「通知表の笛の演奏のところ、全員Aにしよう²⁹⁾」と意気込むリーダーもいたという。5、6月の取り組みで正夫以外は合格した。

正夫は基本がまったく分かっていないので、一つひとついねいに教えてもらうようにした。7月になり、ようやく基礎ができ、若木の歌の演奏に取り組んだ。そしてついに合格。笠原は、3ヶ月かけた「正夫の笛の練習は、どの子にもくだけだつてがんばればやれる」〈仲間と共につけていく力は、時間をかければ必ずみのる〉そんな思いをもたせるに十分だった」としている(157-161頁)。

正夫の頑張りに刺激されて、「松本に教えられた」という子どもや、それまで恐れていた水泳の練習に挑戦する子どもも現れた(162頁)。笠原の正夫への働きかけが、そして正夫の頑張りが、他の子どもたちをも成長させているのがわかる。

以上の取り組みは、正夫のような、困難を抱えた子どもへの特別の配慮の必要性と、その子の成長に合わせて対応を変化させていくことの必要性、また、そのことを他の子どもたちにどのようにして理解させていくべきかという問題の実例を示している。

3) お母さんの入院

一学期の終わり、正夫のお母さんが救急車で運ばれて入院した。正夫にとっては大きな試練だったが、笠原は、「父母の応援を得ながら、正夫に自立の力をつけるいい機会だ、苦しいだろうけど、なんとか、がんばらせよう」と考え、「夏休みは先生と朝勉強

しながら、お母さんの退院をまとうか」ともちかけた。笠原は、この機会に、基礎学力をつけよう、決まった時間に起き、顔を洗うという生活の基本を身につけさせよう、朝ごはんも食べさせようと考えたのだ。児童会長の徹也、学級委員の慎一郎、班長の清も朝勉強に参加することになった(163-167頁)。

正夫は毎日40分の道のりを駆けて笠原の家にやってきて、わり算、漢字、新聞の切り取り、日記の学習を続けた。8月6日の朝、正夫が原爆の記事の載った新聞を持って来たので、原爆の学習をして、8時15分に黙とうをしている。この時のことを慎一郎は日記に次のように書いている(169-170頁)。

ぼくは、今までの夏休みの中で、この夏休みが一番うれしかったり感動したりすることが多かった。心をゆさぶったことの一つは「原爆の学習」です。

去年の夏休みは、「広島原爆記念日」があっても「あっ、そうか」で終わった。

でも、今年は広島原爆のことを深く考えた。そのことについての日記を書くチャンスもあった。新聞の切りとりをして夏休み帳にはった。そして、八時十五分「もくどう」をささげた。そして本も読みたいと思い、先生から峠三吉という人の詩集を見せてもらったり、岩波ジュニア新書の『八月六日』を借りたりした。そしてまた、ぼくは、新聞の切りとりを読みながら、お母さんのおなかの中にいて被害を受けた人のいることも知った。こんな人もいたのかと思った。原爆の落ちた日の「空白の新聞」を今、その日付で作ろうとしている新聞記者の人のことも知った。ぼくは是非、その新聞を読みたいと思った。

戦争を知らないぼくたちに、どんなことを語りかけてくれるかと思った。もっと広島の人達の身になって考えたい。

新聞に「中学三年生が広島原爆記念展」に行っただけで感動したことがあった。ぼくはお金をためて広島へ行きたい。そして日本の歴史をちゃんと見たい。「原爆記念展」や、「空白の日の新聞」の完成したのを、ぼくの目でたしかめたい。

原爆のことでもっともっと調べたいと思った。

8月6日の新聞、峠三吉の詩集、岩波ジュニア新書『8月6日』などを通じて、原爆の学習が深まっ

ていったこと、日本の歴史学習に興味を持つようになっていったことがわかる。この日記は、2学期にクラスの仲間に歴史学習について考えさせるきっかけとなったという。

正夫は、朝は朝学習、日中はサッカー同好会の練習で汗を流して、夏休みの試練を乗り越えた。笠原が、洗濯やそうじの仕方も教えたのであろう。正夫が友だちと一緒に洗濯、そうじをしておいた家にお母さんが退院してきた(170-171頁)。正夫は6年の夏休みを経て身辺自立の力をつけることができた。

正夫の母親の入院への対応という特殊な事例だが、笠原が正夫に笠原の自宅での夏休み中の朝学習を提起し、それまでなかなか手当でできなかった、正夫の基礎学力と基本的な生活能力の形成に取り組んだもので、この夏休みを通じて、正夫が、基礎学力とともに、洗濯やそうじの能力も含めた身辺自立の力を形成できたことが、正夫の自立へとつながっているように思われる。

4) 正夫の夜明け

二学期の始業式の朝、陽に焼けて、一段とたくましくなった正夫が、洗濯したての「真っ白いジャージを着て登校」したことが、クラスの子どもたちに正夫の変化を強く印象づけた。夏休みを振り返って書いた作文や日記に、正夫を見直すものが次々と出て来たため、笠原は、学級通信に「正夫とともに」の4ページの特集をくんでいる(171-174頁)。

「松本くんがまぶしい」「松本くんにおしえられた」こんなふうに松本くんのがんばりを日記や作文に書いて応援している仲間がふえてきた。一学期には「どうしても松本くんが好きになれません」と書いていたAさんも、八月十八日の始業式の日記に「私みんな元気かなと思ひながら学校へいそいだ。(略)みんなの顔はいつもどおりのなつかしい顔。でも、その中で松本くんは真っ白のジャージにぴかぴかの顔。わたしは松本くんきつとがんばったんだなあと思った。夏休みノートは全部おわらせたという。それも朝早く先生のところへ通って。(略)松本くんはきつと真剣にやったから、あんないい顔をしているんだ。わたしも二学期はこつこつやる力をつけます。……」と書き、松本くんから真剣に学ぼうとする人もでてきた。

松本くんよ

いいなあ。がんばって過ごすど、こんなふうにみつめ、学んでくれる人がいる。細越さんはローマ字日記に「……びっくりしたことは、松本くんが、すごくきれいになった。すっきりした。かみも切ったし、なんだかハンサムになったような気がした……」と最近りりしさを増してきた松本くんを発見して書いている。そうだ。木戸さんも言ってたよ。「サトウハチローの詩“サッカーできたえるんです”を六班で松本くんが一番早く、はっきりいえるようになってきた」て。火曜日は、委員会があるからと、三班の人も六班の人も身支度をしないで、そうじしようとしたら、きりりと前かけのひもをしめた松本くんが、「身じたく！」と言っていたね。今の松本くんは、だらしなさを指てきされて、「またわすれたの」といわれていた以前の松本くんではない。気がついていないみんなに呼びかける力をつけてきた。よびかけられたみんなも、「あっそうだ」とすなおにこたえる。そこがいい。仲間のはげましあいがある。ぼくたちはみんな仲間なんだという思いが生まれてきている。「松本くんに教えられた」という熊谷くんの文を紹介しよう。

「私はこの夏休み、松本くんに教えられた。それは、私がひとり公園にいるとき松本くんが来て、『熊谷、もうおれ、夏休み帳おわったぞ』とうれしそうに教えてくれました。『えっ、もう』とびっくりしてききました。その時は、もう自分がはずかしくなった。それでわたしは、すぐ家に帰って夏休みノートをひらいて社会をやった。でも、何日かしてまただらけはじめた。そして松本はいいなあと思いはじめた。(略)松本といいライバルになりたい」

松本くんよ。松本くんのがんばりに刺激されて自分をしっかりさせた人がいるんだ。熊谷さんは「教えられた」とはっきり書いている。「松本くんはカタカナ日記を夏休み中も書いた」と聞いた熊谷さんは、「川とノリオ」をローマ字になおし、すきなところを暗唱した。自分の目標にむかって力を競うというのはいいものだね。藤田さんはこんな日記を書いていた。

「……毎朝ラジオ体操をしている時、必ず、ひまわり保育所のところを通って松本くんがいそいでいた。わたしはすぐ、先生のところへ行くんだ

などわかって、“松本くんがんばりなよ”と手をふってわかれた。わたしは松本くんのがんばりにも負けてはいられない……」

やっぱり松本くんをみつめる暖かい目が描かれている。お母さんが入院していても、さびしさに耐えてがんばっていた松本くんにおくる声援の目だ。手をふって「がんばれ」と合図してくれる仲間に支えられて、松本くんの朝勉強はつづいたんだなあ。

人間がいっしょうけんめいがんばると、顔つきも変わってくる。くっきりしてくるんだ。心もやさしくなると、もっとみんなから学ぼうという気持ちがあうまれてくるものね。「サッカー」という題で五枚も書いたね。「……苦しいけどがんばるんだ。それは、まっちゃん、茂ちゃん、ナッカ、ちんみちゃん、うすきくん、そっさんのように、じょうずになりたいし、秋の大会に出たいから」とていねいな字で書いてあった。めあてができたんだね。薄木くんはそんな松本くんを、「新しいキーパーを決めた。背も高く身体もがっちりしているからと田中先生は松本に決めた……松本はおもいきりがいいから、いいキーパーになれる。何より練習を重ねていいキーパーになってがんばれよ」とはげましている。

いい仲間達よ、共に伸びていこう。(『大地』336号)

笠原のこの文章には、正夫の成長の様子とともに、それに刺激されて頑張り始めた仲間の様子も描かれている。正夫がカタカナ日記を書いたと聞いて、「川とノリオ」をローマ字になおし、すきなところを暗唱するなど、自分の目標を設定して力を競っていることが注目される。教師主導で、一律の学習課題を課して競争させるのではなく、子どもの側が、今の自分にとってどのような力をつけることが必要なのかを考え、そのためにどのような課題に挑戦するのかを自主的に設定して頑張るといふ、主体的な学習活動が成立している。

正夫は、このすぐ後に「わかるってうれしい」といふ日記を書いた(174-175頁)。

算数がは(わ)かってきた

ぼくは、さんすうがはかってきた。いままでは人を見てやることもあった。いま算数は分数が

はからない。でもかけざん、わりざんは、ぜったいとはいえないけど、はかってきました。かけざんやわりざんがはかってきたとき、かいものについて一二五円お五つかうときは、かけざんでやると、一二五×五で六二五円とはかり、とってもうれしいとおもいました。

こんなべんりとははかりませんでした。いっしょうけんめいしたかいがありました。さんすうは、こんなべんりとはしりませんでした。いっしょうけんめいしてよかったとおもいました。みんなは「そんなこと」とかいゆうとおもうけど、ぼくは、いいんだなあとそのときおもいました。

わりざんは、おみせにいてやすいのとたかひがあってもはかります。トマトで一〇〇円で三つあって一つ三五円のとあって、どっちにするかといゆうと、ぼくは $100 \div 3$ で三でわったら三十三で三十三のほうが、やすいです。わりざんもはかっていかったです。こんど、おみせやさんにいったら、わりざんがしているんだから、やすいほうをかいたいと思いました。ほんとうにさんすうが、はかるとべんりだなあとおもいました。

このように、夏休みの朝勉強で算数がわかるようになった喜びを書いている。勉強したことをすぐに生活に生かして、「本当に算数がわかると便利だなあ」と実感している。正夫にとっては、学力が「生活」に直結した「生きる力」になっているのだ。「勉強はくらしに役に立つ」という正夫の学びを、笠原は、「正夫の夜明け」と評している(175頁)。正夫は、ますます意欲的に学習するようになっていった。

勉強がわかる喜びを知った正夫の日記には、次々と詩が書かれるようになった(176-177頁)。

のいちご

まっちゃんとサイクリングに行った。
道ばたにのいちごがあった。
つゆがのっかってて
赤いいちごがこぼれておちそうだった。
のぞいたら
はっぱの下に二こあった。
よこにもあった。
ぜんぶで十二こはあった。
先生やともだちにみせてやりたかった。

山にいたときののいちごをおもいだした。

山ののいちごは
こののいちごより大きかった。
山のとおりくってみた。
かたくてすっぱかった。
まっちゃんはおいしいとゆった。
山のときみたくいっばいくいたかったけど
せっかく赤くなって
かわいそうだと思っていきました。

この詩にあらわれた正夫のやさしさを子どもたちは大きな感動をもって受けとめた(177-178頁)。

きたないとか、だらしないとか、心のどこかでさげすんでいた松本くんのどこに、あのやさしさがしまわれていたんだろう。〈せっかくなっているのにかわいそうだ〉なんて！わたしなら「あっ、いちご食べたい」「おいしい」というだけだろう。(飯島明子)

わたしの目にも、赤く色づいた野いちごが浮かんでくる。赤い野いちごにつゆがのっかっていてこぼれそうになっているところは、ずばりといいあててるなど思った。何か松本のやさしさが見える。「ともだちや先生に」のところだって「のこしておいた」ところだってそうだ。すごく暖かい詩だった。美しさより松本くんの暖かさが、わたしに伝わってくる。(大嶋美佐子)

松本くんの心はすんでるなあ。詩人の心だ。(薄木裕行)

やさしさのこもった詩でした。お母さんも「この子優しい子なんだね」と言ってくれました。(吉井恵利)

正夫の心の美しさを見直し、正夫の急速な成長を鑑に自分も成長したいと考える子どもも現れた。

……松本くんの詩を読んだ。何度も読んだ。……松本くんは一日一日伸びていく。そして松本くんの心には、いつもみんながいる。私の心に、松本くんのようにみんながいるだろうか。松本がいたろうか。(略)できることなら、松本といっしょに

なんかなりたくないとか心のどこかで言っていた。でも今日、野いちごの詩を見て、本当の松本くんにふれたような気がする。汚かった松本くんだけど、心は私よりずっときれいだ。いくら下に見られたって、私たちのことを思っていた。「先生や友だちにみせたかった」人への思いやりをもっていた。(略)わたしには、松本くんの伸びていく音がきこえる。わたしも松本くんといっしょに伸びていきたい。(細越麻子)

笠原は、「子ども達が正夫によって育てられはじめた」と評している(179頁)。

この頃の正夫を見て子どもたちは、「なんか、松本が怪物に見える。一秒でもおしいみたいに授業を受ける。もし、ぼくらと一年の時から同じだったら、ものすごい力がついて、ぼくらはもうかなわなかったろうなあ。この一年で六年分をとりもどそうとしているみたいだ」と言ったという(180頁)。

正夫が書いた「きんぎょ」という詩を学級通信に載せて、笠原は次のように書いた(181-182頁)。

きんぎょ

ずっとまえからかっているんだよ。
ぼくのペットをね。
ぼくのかわいいもうとをね。
ぼくのかわいいもうとはきんぎょだよ。
ぼくいつも学校からかえってくると
すぐにとはいかないけれど
みるんだよ。
そしたらかわいいなどおもうんだよ。
だからぼくさみしくないんだ。
だってぼくには、
いもうと二ひきいるんだもん。
先生、
ぼくたいせつにするからね
みっててね。
先生にいっぱい、みしてやるからね。

正夫はやさしい子だなあ、小さい金魚鉢の中でスイスイ泳ぎまわる赤い金魚をじいっと見ている。そして「おい今日は元気か。僕は今日発表いっぱいしたぞ」なんてしゃべっているのかなあ。お母さんが入院していた時、夜、暗くなって病院から

帰らなければならない時間になった時、「正夫。うちさ帰って寝なさい。金魚もいるし、さびしくないしょ」とお母さんが言ったら「ぼく弟が誰かいたらなあ」で言ってたね。「……だから、ぼくさみしくないんだ。だって、ぼくには妹二ひきいる……」というところを読んだ時、わたしはぐっと胸をつかれた。そして金魚にこんな気持ちをよせるようになった正夫くんの心の成長を見ました。そういう心を、言葉にして文に表せるようになった正夫くんを、松岡くんは、「……松本は今、すて身の努力をして、みんなをこえた。心や身体が育っているのが、ぼくには見える」と表現している。本当に若木のように伸びつつある！

さびしさに耐える正夫の気持ちに思いを寄せ、正夫の成長を見つめ、それを仲間に伝える笠原の姿を確認できる。

この頃の正夫の急速な成長の姿を見て、笠原は、「わたしは、本ものの学力は、人間を育てると信じて来たり、そのことを子ども達にも、父母にも語ってきた。しかし、これほど鮮やかに、わたしに証明して見せてくれたのは正夫がはじめてだった」と述べている(183頁)。

市内の小学校陸上大会の走り幅跳びの代表に選ばれたり、授業でみんなの手本としてやってみせたりすることを通じて、正夫は積極さを見せるようになり、授業で走り高跳びのリーダーを買って出、朝練習で熱心にみんなを指導するようになった。

学級の委員にもいくつか立候補し、最初は落選が続いたが、ついに副議長に当選している。当選を受けて、正夫は、「ぼくはクラスの人たちのおもみがせなかにぶつかってきたかんじがしました」と書き、自分の「だめなところ」をなおしていきたいと宣言している。それでも副議長が務まるか不安に襲われた正夫は、クラスの仲間に信頼を寄せ、「たすけてください」と訴えている。笠原は、「人から支持されるということが、こんなにも深く自分を見つめていくことができるのだということを、わたしは正夫に教えられる思いだった」と語っている(189-198頁)。自分を信頼してくれる仲間の存在を意識し、仲間の信頼に応えようとするのが、正夫を成長させているのだ。

いっしょうけんめいの正夫の姿を見て、「みならいたい」という子も現れてきた(198頁)。

松本くんを見ならいたい

朝学校へ来たら、九人の人が入り口のところにくつをぬいでくつ下もぬいでからぶきしていた。みんなが、からぶきしていたから、私もしたんだ。でも松本くんはちがう。みんながくる前から自分ひとりで教室をみがいていたという。私がきたときは、もう大分きれいになっていた。もし私だったら、みんながやっていなかったら、自分もしないと思う。でも松本はちがう。誰がやっていなかったって、誰が見ていなかったって、誰もいなかったって一人でやっていた。みんなが来てからも手を休めないで汗を流してやっていた。背中をさわると服がしめっぽくなって、がんばっているのがわかった。私はこういうところ松本くんに見ならわなくてはだめだ。本当に松本くんは、すごい。

(小野布美子)

夏休み中に、洗濯やそうじの能力も含めた身辺自立の力を身につけ、それ以前の、顔も洗わず、汚れた服を着ていた自分と決別することで、正夫は大きく成長し、周りの仲間のまなざしも一変することになった。また、基礎学力を身につけ、「勉強はくらしに役に立つ」と実感するようになった正夫は、6年分を取り戻そうとするように意欲的に学習するようになり、また、そのやさしい心を次々と詩に表現するようになった。正夫の学びの姿は、自己表現や生活につながる、生きる力としての学力の問題を提起している。

正夫は、自信がつくことで、体育でリーダーを買って出たり、副議長に立候補して当選するなど、仲間のために自分の力を発揮したいと、積極さを見せるようにもなった。自分を信頼してくれる仲間の存在が成長の力になっているのである。また、正夫を見つめる子どもたちの記録からは、子どもたちが、正夫の努力する姿を見つめながら成長していく様子を確認することができる。『友がいて ぼくがある』の題名が示すように、信頼しあえる仲間の存在が、お互いの成長の力になっていることを示している。

5) 嵐のなかで

「自分を見つめ悩みながらも、なんとか自分なりに、せいっぱいの歩みをしはじめた正夫」に、笠原は「もっともっと自分の生活を見つめさせたい」

「正夫自身が、自分の中の何をのりこえていけばいいのか自ら発見して、生きていく力をつけなければならぬ」と思っていた。その課題は、10月下旬、母親の失踪という「余りにも厳しすぎるできごとを伴って正夫につきつけられた」。ガスが止められ、灯油も底を尽いた家に、食べ物もお金も置かず、子どもを置き去りにしたのだった(200-204頁)。

笠原が当面の食事のサポートをし、母親と入れ替わりで家出から帰ってきた19歳の姉に正夫の世話を託した。姉には、「将来の生活設計も含めて幾晩も話し」た上で、美容院をやっているクラスのお母さんに頼んで、美容師見習いの仕事の世話をした(203-209頁)。

正夫の母親の家出のことはクラスの子どもには話していなかったが、1週間ほどした学級会で、正夫が、「六の一のみんなを信じるから話します」と告白し、「ぼくに、役所の人施設に行きなさいと言っているけど、ぼくはみんなといたい」と目に涙をいっぱいためて訴えた。子どもたちも、「松本、どこへも行くな!」「先生、施設なんか行かせないでください」と涙声で立ちあがった。正夫は、「ぼくを支えてくれよ」と仲間に向かって叫んでいるのだった。学級代表の徹也が立ちあがって、「先生、松本は、六の一の大事な大事な一人の人間です」と言った。続いて修一が、「ぼくは松本を施設になんか行かせない。ねえ、みんな、自分達のクラスの一人が悩んでいる時、助けられないクラスは学級じゃあない。それはただの集まりだ。ぼくらで守ろうよ。松本くん負けないでください」と発言した。発言しなかった子どもたちも、日記に同じ思いをぶつけた。仲間を支えられた正夫は、「毎日自分にいいきかせるように気持ちを日記に刻んだ」(209-215頁)。

ぼくは友をなくしません

うちの母さんは、もうぼくたちをおいてどっかいったのかな。うちの母さんぼくたちのことはなんも考えていないのだろうか。もうかいてこないつもりなんだろうか。ぼくさみしいけれど、おねえちゃんといっしょにやっといこうとおもいました。しせつにはいかななくてもいいといわれました。かあさんがきょうこないところをみれば、もうこないとおもいました。もうまつのあきあきしてきました。だからおねえちゃんといっしょに

くらしたいとおもいました。もうあんなかあさん
とくらすのがいやになってきました。でも母さん
にてつだってもらったことはおぼえています。も
うできません。かあさんは、ほんとうはかえっ
てほしいけど、やっぱり友だちがいるから、ぼ
くははなれません。ぼくにとって友だちはいてほ
しいものです。(十一月七日)

友がいるからがんばる

先生、ぼくはたくさん、しんじられるともがい
ます。ともがいるのががんばれるのです。ともど
いうのと自分がいます。先生、ともというのはやっ
ぱりいいもんです。ぼくは、この友とそうだん
できる友にいっしょうけんめいになってみせるつ
もりです。(略)先生、人には、とつてもたのし
いとき、かなしいときがあるんですね。でもぼ
くはほんとうにいいのです。友がいるからです。
ぼくがそうだんしたらこたえてくれる人もいます。
先生、ぼくほんとうにいい友をもったとおもいま
した。(十一月八日)

母さんのいない家

かあさんがいなくても、へっちゃらです。ちょっ
とさみしいけど、おねえちゃんとやればできます。
ぼくには友だちがたくさんいるからがんばれます。
ぼくに友だちがいなかったら、わるいみちにはいっ
ていたかもしれません。ぼくはしあわせだとおも
いました。どうしてかという、いいともだちが
たくさんできて、その友だちはなにかあるとたす
けてくれておこってくれる友だちだからです。ぼ
くは、こっちの東小学校からもうてんこうしたく
ありません。やっといいい友だちがたくさんできた
のですから。いい先生にも、であったのだから、
もうどこにもいきたくありません。ぼくはやり
ぬきます。このつらいところからでたいとおも
います。へびが上にかぶさっているのをとるときだ
とおもいます。この上にかぶさっているのをとっ
てひろいところに行きたいとおもいます。もっと
そだちたいとおもっています。(十一月九日)

先生、ぼくがんばるよ、
わすれられないけどね

先生、ぼくがんばるよ。ぼくは、がんばる。く
るしいのをこえていく。みんなといっしょに、が
んばります。みんなもいっしょにがんばって自分
に勝とうね。先生、ぼくね、きょう、かあさんの
ことかんがえたんだ。でも<こんなことかんがえ
ても>と思ってやめた。でもやっぱりかあさんの
ことはおもいだすもんです。先生、たまあにか
んがえても、それからもう、かあさんのこときえ
ないんだよ。

ぼくがここからぬけだしたときが、そだったと
きでしょう。でも、ここからぬけだすのはつらい
ことですね。

でもね、かあさんのほうをえらぶか、みんなの
ほうをえらぶかは、ぼくがきめること。どっちか
というと、みんなのほうをえらんだんだ。がんば
ってえらんだんだよ。つらいことですね。ほんとに
つらいよ。でもぼく、ここからぬけだす。このき
もちからはなれていくよ。ここからすすむよ。先
生がんばります。(十一月十二日)

『友がいて ぼくがある』、こうして、正夫は、断
ち切りがたい母親への思いを断ち切って、クラスの
みんなに支えられて自立する道を選び取ったのであ
る。

このような正夫の姿は、クラスの子どもたちを揺
さぶった。ひとみは、「松本くんのように、しっか
りした柱を持って生きている人が、六の一にいるだ
ろうか。私は松本君の生き方を心の中から離さない」
と書いた。慎一郎は、「松本は自分をまるだしにす
るから、ついていく友がいる。でも、ぼくにはそう
いう友はひとりもない。……本当の友というのは
一人もないような気がしてきた。ぼくは自分のこ
とをまるだしにできなかった。今までの力は全部先
生につけてもらった力のような気がする。……ぼく
も松本みたく、みんなを信じて自分をかたれるよう
にしたい。ぼくは松本の生き方に教えられた」と正
夫の生き方から自分の生き方を問い直している
(215頁)。

笠原は、これまでの正夫の歩みを振り返って、友
が正夫を支え、「表現できる文字」、「身につけた学
力」が「生きるための力」となると、次のように
総括的に振り返っている。

「苦小牧へ来た十歳の夏、彼は自分を表現するも
のとしての文字を持たなかった。夜毎に家をぬけ出

る母親の姿をおって、なりふりかまわず、『おかあさん』と泣きさけびながら、夜の町内を探し歩き、それは近所の噂にさえなっていると耳にしたことがあった。遠足の弁当も、運動会の弁当も、『母さんは具合悪いから』と手づくりしてもらえなくても、それでも、頼るべきたったひとりの母親として慕い続けていた。それほど好きな母さんだった。

でも今、『つらいよ』といいながら、『友を選ぶ』という。『友達がたくさんいるからがんばれます。ぼくに友達がいなかったら悪い道にはいっていたかも知れませんが』と友を信じ切って生きようとしている。正夫は今、『ぼくはみんなと一緒に生きる』と表現できる文字を持った。自分の心のありったけを、ひらがなとカタカナで伝える。そして、その文には正夫が身につけた学力のすべてが注ぎ込まれていた。正夫の学力は生きるための力になっていた。だからこそ強かったし、仲間たちは心を打たれた。『決して離さない』といった(215-216頁)。

笠原は、正夫の一連の日記を学級物語『大地』に掲載し、子どもたちや父母、そして自分自身に言い聞かせるように、次のように書いた(217-218頁)。

「いいかい、このとび方だよ。正夫はね、前足がピーンとあがって頭が後ろにそってるしょ。これが高とびの基本だよ。さあ、やってみて！」学年の見本になってとんでみせる正夫。歌の時は「大きく口をあけて」というと、一番大きく口をあけて指揮者に集中する。学年の先生は、「正夫は、学習の基本を、かっこうつけないですなおに取り入れるから力がのびるなあ」という。『川とノリオ』で「ノリオはじいちゃんの子になった。たばこくさいじいちゃんにだかれてねた」というところも、みんなが「ノリオには、やさしいじいちゃんがいい」「じいちゃんはノリオを大切にするだろう」といった時、正夫は、「ぼくは、このじいちゃん、ノリオをすごく大切にしているけど、それとじいちゃんはノリオをかわいいと思っているけど、じいちゃんとかあさんはぜったいちがう。ノリオはやっぱりくやさしいし、さびしいと思っている」と主張しつづけた。テスト用の答えなんかじゃあない。授業にぐいぐいこんでくるのだ。本当にわかりたいから勉強する。正夫は学習のあり方を教えてくれる。

わたしは、教育は、父母・地域・学校の共同の

力の上に成り立つと思ひ、自分ではそれを求めてきていたと思っていた。でも子ども達ひとりひとりの生活の土台を見ていなかったようだ。正夫が「ぼくには友達がいる。ぼくがいる」と書いた時、正夫が生きてきた場——子どもをとりまくものすべてに目をやってきたらどうかと考えた。「先生、ぼくらの生きている場、仲間のありようを、もっとていねいにしっかり見てくれ」と語りかけられたようだ。

一年前に正夫が「字でいいですね、字をおぼえたらくやさしいこともがまんしないで書けるから」と書いた。今、正夫は自分に語りかけるように、母さんや友のことを書き続けている。わたしは思う。正夫に文字があるから、しっかりとみつめ、考えられるんだと。

「一人ひとりにゆきとどいた教育を」といわれる。真の教育というのは、しっかり生きていく力をつけることなんだと、正夫がわたしに語りかける。今、正夫はわたしの先生でもある。

笠原は、正夫の成長の姿を通じて、「本当にわかりたいから勉強する」という「学習のあり方」、「子ども達ひとりひとりの生活の土台」「仲間のありよう」をしっかり見ることの大切さ、そして、「真の教育というのは、しっかり生きていく力をつけることなんだ」ということを学び取っている。そして、『大地』を通じて、そのことを、子どもたちや父母にも伝えているのだ。

6) 周囲の人々の善意に支えられて

11月になると北海道はもう冬になるが、正夫はいつまでも夏のジャージ姿であった。それを見かねた学校警備員さんが、正夫にと、お古の冬物のジャンパーと幾許かのお金を笠原に手渡してくれた。『大地』を通じて正夫のことを知ったクラスの父母も、自分の子どもにわからないように、お古のセーターやジャージを届けてくれたり、食事に呼んでくれたりもした。冬休みは一人でさびしいだろうとテレビを届けてくれた親もいた。笠原も、仕事を終えてから、毎晩、正夫の家に通った(224-225頁)。

笠原は、子どもの「誕生日を一人ひとりたっぷりと祝うことを、学級経営の中に位置づけ」ていた(223頁)。「仲間達のその子への思いを綴った文をとじて」(233頁)「〇〇の本」としてプレゼントし、

一人ひとりからの1分間スピーチで誕生日を祝った。12月3日は正夫の誕生会で、正夫も、切り絵、よせ書き、「正夫の本」、手づくりプレゼントなどと仲間のスピーチで祝ってもらった。そして、次のような日記を書いた(237頁)。

(略)「十二さいおめでとう」といってくれた。うれしかったよ。いいときがあるっていいもんだね。先生、ぼくはまちがいなくからだは十二さいになりました。でも、心はまだ十二さいではありません。ぼくは、まだふくれることがあるし、心がびしょとしていないことがあります。とつてもはずかしいなおもいました。それに、しげちゃんがさびしいのもわかりませんでした。それと、ぼくどりょくがなくなっていました。「かんじーきゅうまでおわったよ」といったら、先生は「またやりなさい」といいましたね。ぼくはもうはらがたちました。先生がにくらしくてたまりませんでした。「先生、ぼくちゃんとテストやってすすんでいるよ」といっても、先生は「だめ」といった。いいじまが「班のテスト」といって漢字のもんだいをやったら、ぼくは、わからなかった。だから、「やっぱりもういっかいやります」といって前にむいた。そのとき、ふとおもいました。ぼく、でたらめにやっていたなって。

だから、先生はぼくのことをいつくしんでそだてようとしているんだなおもいました。わかったよ。先生、ありがとう。

笠原は、この頃の正夫との関わりについて、「目前に控えた中学のことを思うと、中学の教育についていく学力が不安でならなかったから、ゆっくり待つということができなくなってしまって、叱咤激励しておいつめることが多くなっていった。太陽の光を浴びて、自然にすこやかに、たくましく育つ姿を理想に描きながら、自分のしていることは、出かかった芽を強引にひっぱり伸ばそうとするにも似ていると思ったことがあった」(238頁)と振り返り、「漢字一級まで終わりました」と言いに来た正夫に、「書いただけだ、覚えていないという思いの方がさきに頭を掠め」、「またやりなさい」という言葉しか言わなかったことを反省している。ふくれた正夫を見て、飯島明子が、「班のテストするよ」と言って、班で進級テストに取り組んでくれ、正夫がまだ覚え

ていないことに気づくことで解決するのだが、正夫に、「先生はぼくのことをいつくしんでそだてようとしているんだな」と書かれて、気恥ずかしくなり、正夫の将来を心配するあまり、「ゆっくり待つ」ということができなくなってしまっていた自分を反省しているのだ。

12月になって、生活保護費が止められているのに気づいた母親が市役所に出向いたことで、母親の居場所がわかり、笠原は正夫とその姉と民生委員さんといっしょに、母親に戻ってくるように説得に行ったが、拒否されてしまった(226-227頁)。

正夫の姉は、母親が、子どもを放り出しながら、同じ市内でぬくぬくと暮らしていることに腹を立て、年が明けると、自分もまた出て行ってしまった。正夫はついに一人っきりになってしまった。

次の日から、正夫は「まるで不安をふりきろうとするかのように、ものごとに打ちこみはじめた」。初心者であったスケートも、ホッケー部の友達に指導を受けて、一生懸命練習した(247頁)。

他方で、「先生、ぼくあんな母さんいやだ。でも、どうしても母さんのこと消せないんだ。ずうっと考えていたらおそろしいんだ」と揺れる心の苦しみを日記に書き続け、正夫の「心の中は、はかりしれない不安や迷いが渦巻いていた」。

笠原は、「いいんだよ。消すことはないよ。つらいかも知れないけど、母さんの思い出は大切にするんだよ。正夫に母さんを思う気持ちがあるから、やさしい子でいれるんだから」と慰め、「いいかい、がんばるんだよ。みんなも先生もいるからね。」と励ました(248頁)。

卒業するまでの1ヶ月間、正夫は民生委員の高橋さんの家で夕食と朝食の世話になり、初めて「家庭」の暖かさを知ることになった。子どもたちは、卒業の数日前に開いた、2年間の歩みをふり返るリサイタルへの案内状を自分の父母に出した。正夫は、高橋さん夫婦に案内状を送った。リサイタルの終わりに、正夫は、感謝の思いを綴った手紙を、カーネーションとともに高橋さん夫婦に渡した(249-251頁)。

正夫は、学級の中で一番苦しい状況にあるはずなのに、いつも屈託のない顔をして友達と戯れていた。プロレスごっこが昂じて喧嘩になったりすると、正夫を不憫に思う笠原に、正夫を助けたいという思いがこみ上げ、それをじっと見ている女子に、「何故とめないの！正夫だからか」などと非難

がましいことを言ってしまった。それに対して、修一が、「先生、今一番、差別はいけないといいながら、それをしているのは先生だよ。ぼくらは友達だから喧嘩できるんだ。先生、同じに見た方がいいよ」と日記に書いてきた。それを読んで、笠原は、「本当にそのとおりであった」と反省している(251頁)。

卒業が近づき、「卒業まであと〇日」と黒板の端に書かれるようになった。子どもたちは、「雪がとけると春になり、ぼくらは中学生だ。しかし、それは松本との別れの日でもある。雪よとけるな」「ゆっくり歩く、ゆっくり戸を開ける。(略)なにかもゆっくりやれば一日がゆっくり過ぎていくような気がして、(略)ゆっくり日が流れれば、松本と長く一緒にいられる。六年一組が長く全員一緒にいられる。日々よゆっくりすぎてほしい」と日記に書き、最後の時間を惜しんでいた(253頁)。

2月24日、「今日は先生のたん生日。六の一のお母さんのたん生日」というよびかけで笠原の誕生会が始められた。子どもたちのよびかけが続き、みんなの歌とプレゼントで祝ってもらっている。子どもたちの作品や父母からの文章を収めた「紀久恵の本」も贈られた。後に、笠原の誕生会をやろうと提案したのは正夫であったことが分かる。

正夫は、「紀久恵の本」の文の最後に、「これからは、じぶんでじぶんのあゆみをえらんでいきます。ぼくには、“心に太陽”とともだちがあります。まえにはじぶんのあたらしいみちがあるんだもの。つらくてものりこえなければならぬよな。つらくても、いままでのことおもいだせばいいんだもん、先生。ぼくは、先生、これからもよろしくおねがいします」と自分の決意を書いていた(260-262頁)。

卒業式とお別れ会を終え、正夫は、中学の3年間を施設で過ごすために旅立っていった。遠ざかっていく汽車を目で追いながら、笠原は、「これしかなかったのか」「もう、わたしにできることはなかったのか」と問い続けた(266頁)。

(5) 2年間をふりかえって

笠原は2年間をふりかえって、つぎのように述べている。

「思えば、実に多くの人たちに見守られた二年間であった。

『あんたは、ちっとも辛そうな顔をしない。毎日

どうして笑っていられるんだ』といった人がいたけれど、それぞれの子も達が自分らしさを出して日々の物語を織りなしていくのを見る時、何故か安心していられた。もちろん、その縦糸・横糸の一本に正夫もなくてはならないものになっていた。

号令をかけて、ぐいぐいリードするリーダーがいたわけではない。ただ、学級で『走る』と決まったら、トップランナーの修一や徹也を中心に走りつづけ、結果としての勝利は、次の目標をもう一段飛躍させた。『新聞を作る』目標ができると、レタリング、作文、文字、それぞれの得意分野を総動員して、美幸や慎一郎、裕行、由紀、崇子たちが力を発揮し、市内コンクール推薦に輝き、その力は班新聞の指導力にもなった。学芸会の劇となると、英樹や晴美が朗読の力を買われて主役となり、由紀や啓子を中心に音楽グループが歌で盛りあげ全校生の人気をさらった。祝賀会や小集会には、ひとみの脚本と明子、智子、拓や俊彦の脇役・小道具は不可欠だった。

いつしか全員がそこにひきこまれて、胸を熱くしていた。誰かが主役になると、他のみんなは脇をかためていた。脇役と見るのは、まわりの者の目で、本人たちは、自分が主役と思っていた。

リーダーは、先頭にいるばかりではない。仲間を活動したくさせていく、縁の下にもいることを、わたしに教えたのはこの子たちだった。

何の時でも、はじめに学級会があり、とことん話しこんだ。リーダーのありようを、その都度、具体的に教えた。(256-257頁)

ここに書かれている様々な活動については、詳細に記録されていないが、5年1学期の学級づくりの取り組みを通じて育ち始めた子どもたちの自治的、文化的能力が、その後の様々な共同の活動の中で高められ、子どもたちの得意分野の力が引き出され、様々な子どもが自分らしさを発揮し、協力しあえる学級集団へと成長していったことを物語っている。

矢川徳光は、クルプスカヤの、「もっともよいのは、人びとを接近させ結合させる共同の仕事による交通である」³⁰⁾という言葉を引いて、彼女が、そのような交通(協働)は子どもたちを団結させ、連帯させて、学校を「連帯の学校」に変えると指摘していることを紹介している³¹⁾。共同の活動の中でみんなのために役割を果たし、それを認められることは、自己有用感を高めることにもなり、学級の中にその

子の足場が築かれることにもなったと考えられる。

この2年間の様々なドラマを、子どもたちも父母も共有することができたのは、「子どもたちの日々を克明におった」笠原の『大地』のおかげだった。

「やり終えた後には、文章化して、したことを辿ってみた。その時、“あれっ、ここにはあの人が出て、ぼくがいた”と誰もの存在感が、した事実の中から明らかになっていった。その役割は『大地』が果たした。わたしは子どもたちの日々を克明におった。

それを子ども達も、父母も読んだ。

それらのことが、やがて、何をしてもみんなのものになる学級にしていっていったのだと思う」(257頁)。

『大地』によって結びつけられた40人の子どもたちは、2年間の中で、誰が欠けてもいけない仲間として結び合うようになっていった。

「誰かが休むと『何か足りないな』というようになった。そして休んだ子は、『ぼく、こんな大事な時に、かぜひいてしまった。(略)たった一日で、こんなに大事な時が過ぎていた。でも、きのうは、よせ書きに、ちょっとのことでも書いてくれて、はげましてくれてうれしかった。これからは休まないように健康に気をつけたい。——功紀』というように、……一日を惜しんだ。

みんなのものを創り上げるために、どの子の力も必要だった。

『正夫、いくな!』とさげんだ時、『かわいそう』や『同情』からでなく、結びあった仲間の一人——せいっぱい生きている仲間——を失いたくなかったのだ」(257頁)。

子どもたちの頑張りを支えた「見守る目」について、笠原は、次のようにのべている。

「そして、『がんばってるな。今度も期待してるぞ』というまわりの人達の見守りは、大きな励ましだったし、安心しきって、実に自然に自分達の力を出させていくことになった。

『先生、見ていてもらえるということは、なんか、やりがいがあってがんばれる。あったかいはげましを感じます。(略)——明子』

『先生、ずうっと前、おれが、同好会の友達や、先輩といっしょにゲームセンターに行き遊んだ時、先生は知っていて、おれに、そのことポツンと言ったよね。ショックだったなあ。あの時先生は、おれの心の中を知ってるみたいだった。先生は、おれのこと見ていてくれると思ったら、おれ絶対がんばる

と思った。そして、先生の誕生日には、おれのせいっぱいの心をプレゼントしようと決めていたんだ。先生がいなかったら、今のおれはなかったよ。ありがとう先生。先生いつまでも元気で、いろんな生徒に心の問題も教えてあげてください。これ、おれのせいっぱいで作ったものです』と、カッターの切り口に苦労のあとが見える切り絵のプレゼントを贈ってくれた子がいた。わたしの部屋にそれは今もある。

見守る目というのは、集団であろうと個人であろうと、その子に向かって真剣に注がれる時、がんばりの気持ちを燃えさせたものだと思う。それが例え小さな炎であろうと、燃えつづける援助をしながら、活動できる場を保障するのは教師の仕事であろう。」(258頁)

仲間や笠原先生が見守ってくれていることで、子どもたちは安心していろいろなことに挑戦でき、成長することができた。笠原は、しっかり見守ることで、子どもの「がんばりの気持ちを燃え立たせ」、「燃えつづける援助をしながら、活動できる場を保障するのが教師の仕事」であるとの認識を深めたのである。

見守ってくれたのは、仲間や笠原先生だけではなく、子どもたちは、学校の様々な教職員、地域の父母などにも支えられてきた。

「自分達の歩みをふりかえった時、あの時には、言語治療教室の先生が、そして、あの時は公務補のおじさんがいた。保健の先生も、警備員のおじさんも励ましの手紙をくれたのではないかと、卒業式の前日、『いくべ』『いくぞ』『いこう』と徹也や修一、まどかを先頭に、おじさんをはじめ、お世話になった人たちすべてにお礼に出かけていった。そして、二時間も戻って来なかった。『たっぷり語って来た』と実に満足そうな表情で戻って来た時は、明日は別れる子ども達が、いとおしくてならなかった。

学校の中ばかりではない。父母や、地域にしっかりと目を向けることができたのも、正夫との出会いがあったからだった」(259頁)。

子どもたちは、担任だけでなく、学校の他の教職員や父母、地域の人々に支えられて成長することを自覚していた笠原は、これらの人々にも協力を求めてきた。自分だけでは支えきれない正夫の存在が、このことの大切さを笠原にいつそう強く自覚させたのである。それだけに、「実に多くの人たちに見守られた二年間であった」という感慨も深かったので

あろう。

おわりに

最後に、以上を通じて明らかになった笠原紀久恵の実践の特徴をまとめてみたい。

(1) 教育信条・教育姿勢・教育目標

笠原は、子どもは、一人ひとりそれぞれに異なる、個性的な存在であるという子ども把握に支えられた、「どんな子も差別されてはならない」「一人ひとりの子に花ひらく時は必ずある」という教育信条を持ち、子どもたち一人ひとりの違いや個性を尊重していこう、現れ方も時期も異なる、一人ひとりの子どもの花ひらくチャンスを大切にし、それにつながる子どもの育ちをていねいに見守っていこうとする教育姿勢に立っていた。

また、仲間の先生方との学習会を通じて学び取った、「子どもの内的事実にふれて子どもを捉える」こと、「自分の内面の中で力にならない限り、生きる力にならない」ということを大切にしていた。前者は、生きた人間人格としての子どもをていねいに捉えることであり、後者は、子どもは、単なる教育の客体ではなく、自己変革・自己教育の主体へと転化することではじめて学習の成果を自分の力にすることができる、だから子どもを生きる主体、学びの主体に育てなければならないということである。

笠原の立場が、子どもを、教育の客体として、束にして扱い、国の定めた教育目標の達成度で評価する、新自由主義的新公共管理の下での学校教育の対極にあることは明らかである。

そして、「どんな子も差別されてはならない」、「一人ひとりの子に花ひらく時は必ずある」という笠原の教育信条は、「どんな人だって、人間らしく生きたいという願いを持っているんだということを、見たり、聞きとったり、感じとったりできる目や耳や心子どもの中に育てたい」という、笠原の教育目標にもつながっていた。

(2) 教育方法

笠原は、生活綴方教育の方法と全生研の学級集団づくりの方法を併用しているが、その生活綴方教育では、生活綴方教育プロパーが重視する、教師の表現指導を通じて綴方作品を仕上げさせることはあま

り重視されておらず、日記、赤ペン、学級物語『大地』を通じて、主に学校生活の中での出来事を題材に、子どもの思い、笠原の思い、仲間の思いを交流することを重視している。

「班・核・討議づくり」による学級集団づくりでは、しっかり話し合い、みんなで決めたことは、みんなで責任を持って、協力しあって実行するという自治的、民主主義的能力を形成することを重視するとともに、挑戦しがいのある月目標を設定し、その課題が苦手な子どもを得意な子どもがサポートすることで達成させ、それを通じて子ども同士のつながりを強め、仲間意識を醸成することが重視されている。

(3) 文化活動・行事の重視

詳細は記録されていないが、子どもたちが自分の力を発揮出来る場として、子どもたちの要求にそった文化活動や行事を重視し、その場で、仲間と関わりながら、仲間と力を合わせながら成し遂げていく体験を積んでいくことで、子どもたちが、自分の力と可能性を一つずつ確認しながら、自信をつけ、また、仲間の生き方から学びながら、成長していくことを大切にしていることがうかがえる。

(4) 子どもの現状分析から発達の環を捉える

子どもを、教育の客体としてではなく、生きた人間人格として捉える笠原は、まず、子どもの現状分析から出発し、どのような働きかけをすることが発達の環なのかを見極めて、その教育方針を決めている。

5年当初に、「この子たちには、身体を動かして自分で確かめながら、ものを捉んだ体験が少なかったにちがいがなかった」という現状分析から、「自分でやってみる」「したことを大事にする」「その成果をみんなのものにする」ことを教えることから始めたのも、運動会の取り組みを通じて自信をつけた子どもたちに、鉄棒のさかあがり挑戦させて、集団の力を一層高めようとしたのも、転入してきた正夫と母親とのやりとりの中で、まずは学校に来させることが大切だと判断したのも笠原の見極めである。そのためにも、常に「子どもの表情、行動、何げないことば、毎日提出される日記から、子どもの声を聞きとろうと」していた(141頁)。

(5) 子どもの育ちをていねいに見守る

「一人ひとりの子に花ひらく時は必ずある」という教育信条を持っていた笠原は、親とも話し合いながら、子どもの育ちをていねいに見守っていた。ミキちゃんとの出会いをきっかけに大きく飛躍した木戸崇子や、正夫のいじめ問題での学級会の話し合いに心を揺さぶられて、変わり始めた下司智久の事例がその現れである。

(6) 個々の親との心を開いた関係づくり

一人ひとりの子どもの育ちをていねいに見守っていた笠原は、個々の子どもの育ちについて、その親とも話し合い、心を開いた関係づくりをしている。それに応えて、親の目から見た子どもの成長の姿を伝える手紙も寄せられ、笠原との間で子どもの育ちが共有されている。

(7) 笠原の生活綴方教育の方法とその役割

1) 日記で自分を見つめる

松岡徹也が6年の終わりに2年間をふり返って書いた日記の中で、「ぼくは、……自分をうつしてくれる日記が大すきだ。ぼくはこれからだって、……自分のために書いていきたい」(44頁)と書いたように、日記は、自分を見つめる場であった。母親が家出をした後の正夫は、「毎日自分にいいきかせるように気持ちを日記に刻」(211頁)み、断ち切りがたい母親への思いを断ち切って、クラスみんなに支えられて自立する道を選び取った。書くことで自分を見つめ、自分の生き方を切り拓く生活綴方教育の役割が生きている。

2) 見守ってくれている安心感

日記と赤ペンは「ぼくらと先生の心のみせあいだ」といわれる笠原の日記指導は、笠原と個々の子どもとの交流の場であった。笠原が、『トンちゃんの日記』(酒井田景三)から学んだ、「子どものとらえたものに共感した心をそのまま赤ペンに託せばいいのだ」という赤ペンの極意が、子どもに、笠原が自分の思いを受けとめ、理解し、見守ってくれているという安心感、受容されているという感覚を与えている。笠原が、一人ひとりの子どものことをよく知り、子どもたちの様子を細かく観察していて、それが赤ペンや『大地』のコメントに反映していたので、なおさら「見守ってくれている」という思いが強かっ

たのだと思われる。

見守られているという安心感は、「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感を子どもに持たせ、子どもは「自分の頭で考え、自分の心で感じたことに依拠して、自分の人生を選んでいくことができる」ようになるとされている³²⁾。

3) 育ててくれる赤ペン

細越麻子が、「先生の赤ペン——先生になりたい」で、「その言葉がわたしを育ててくれる」(107頁)と書いたように、笠原の赤ペンは、共感するだけでなく、子どもに考えてほしいメッセージを発している。たとえば、正夫が詩の朗唱テストで一カ所言いよどんだ時、笠原が合格を認めなかったことに対して、「先生は正夫くんに厳しすぎる」(147頁)と日記に書いてきた子への赤ペンがそうだ。笠原の赤ペンは、子どもの思いを受けとめながら、子どもに考えてほしいメッセージを発することで子どもを育てているのである。

4) 学級集団づくりの組織者としての『大地』

日記に書かれるのは学校生活に関わる事実や思いが中心で、その中の重要だと思われるものを笠原は『大地』に紹介し、クラスで共有させた。

「どんな人だって、人間らしく生きたいという願いを持っているんだということ、見たり、聞きとったり、感じとったりできる目や耳や心を子どもの中に育てたい」という笠原の教育目標を達成するために、笠原は、班や学級会での話し合いを重視するとともに、そこで出た意見や、後に書かれた日記などを『大地』に載せ、子どもたちに共有させ、笠原が子どもたちに考えさせたいと思うメッセージもつけ加えて考えさせた。子どもたちは、仲間の行動の様子や思い、またそれに対する笠原の思いを読んで、自分の生き方を考え、成長していった。

そうじ、学級会、月目標達成の取り組み、様々な文化活動や行事など、学級集団づくりの様々な取り組みと活動が、生活綴方教育の方法(日記、赤ペン、『大地』)を駆使して交流され、学級集団づくりが非常に効果的に進められ、仲間意識が高まっていった。『大地』はその要として、学級集団づくりの組織者の役割を果たしている。

5) 父母の理解と協力を組織した『大地』

『大地』は、学校生活の様子や、固有名詞付きの子どもたちの様子を家庭にも詳しく紹介することで、笠原の実践に対する父母の理解と協力を組織する役割も担っている。父母は、『大地』を通じて、自分の子どもと同世代の様々な子どもたちとその育ちの姿を知ること、それまでは主に自分の子どもの姿を通して形成していたその子ども観や子育て観の幅を拡げることもできたと思われる。また、『大地』を読みながら、なかま達が力をみがきあい共に育つようすを見てきた私には、どの子もわたし達の子どものような気がする(164-165頁)という親からの手紙が示すように、父母の中に、クラスの子どもたちを自分の子どもと同じように見守り、支えようという意識が醸成され、正夫への支援にもつながったと思われる。

(8) 仲間に認めてもらえる誕生会

笠原が取り組んだ行事の中で、クラスのみならず祝福される誕生会が持つ受容体験としての意味には大きいものがあつたように思われる。内気で、気が弱かった下司智久のお母さんが、「誕生会では、『切り絵』や、クラス全員のお祝いの言葉で、自分が認められるよろこびを知ったようです。……認められることで、はりができて来たようです(104頁)と書いているように、みんなに祝ってもらえる誕生会は、子どもたちに、自分が認められ、受容されたという思いを強く与えたようで、クラスの一員という意識が強まり、自分も仲間のために何かやりたいという思いを強めたようである。受容体験の乏しかった正夫は、とりわけそのような思いが強かったようで、5年生の誕生会の時は涙を流しそうなくらい、うれしそうな表情をしていたし、6年生になったある日、笠原が、「今日は、誕生会できない」と言った時、他の子どもは仕方がないという様子だったので、「熊谷の十二歳は、きょうしかないんだぞ」と異議を唱えるほどだった。一人に40分もかけることは現在は不可能であろうが、みんなに祝福される誕生会³³⁾には重要な意義があるように思われる。

(9) 一人ひとりの成長をうながす学級集団づくり

以上の検討を通じて、笠原の実践は、生活綴方教育の実践というよりは、全生研の学級集団づくりの方法と生活綴方教育の方法を組み合わせた、「一人

ひとりの成長をうながす学級集団づくり」の実践と特徴づけることができるのではないかと。一人ひとりが、学級集団の一員として生活し、活動する中で、自分の思いを日記に表現し、教師の赤ペンで受容され、『大地』で紹介されることで仲間からも受容され、自信がつき、また、『大地』に掲載された仲間の生き方から学ぶ中で、お互いの仲間意識が高まり、自分もみんなのために何かやりたくなる、その中で自己変革し、成長を遂げていっているのではないかと。すべてが詳しく記録されているわけではないが、子どもたちが話しあって、自分たちで決めた様々な取り組み、とりわけ、子どもたちの要求にかみ合った文化活動や行事が、体験を耕す場、共同体験を育む場、各自が自分の得意分野で力を発揮する場として重要な役割を果たしているように思われる。

子どもを、教育の客体として、束にして見るのではなく、自ら成長し、自己変革を遂げていく主体とみて、一人ひとりの子どもの違いにも配慮しながら、父母の理解と協力、他の教職員や地域の人々の協力も得て、子どもたちの成長をうながし、学級集団づくりを進めている笠原実践は、教育とは本来どのようなあらねばならないかについての一つの説得力ある実例を示している。

註

- 28) 智子は、正夫と対照的な家庭環境で育った子どもであった。7人兄弟の末っ子で、祖父母と、銭湯を経営している働き者の両親の愛情に包まれて育てられている。どんなに忙しくても、家族みんなが自分に心を寄せてくれているという思いが、友を見る目の暖かさを育て、自分でできることは自分ですという父母の教育方針が、遠足の弁当も自分で詰めていく生活力を育てている(126-134頁)。
- 29) 努力の成果が成績に反映される到達度評価型通知表を使用していることがうかがえる。
- 30) クルプスカヤ『生徒の自治と集団主義』明治図書、1969年、20頁。
- 31) 矢川徳光『増補 マルクス主義教育学試論』明治図書、1972年、90頁。
- 32) 高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』新日本出版社、2004年、59、63頁。
- 33) 誕生会の取り組みでは、親から、自分の子ども

が生まれてから今日までのさまざまな喜びや苦勞
を手紙の形で書いてもらい，教師がみんなの前で
読んであげる「生いたちの記」の実践にも重要な
意義がある（土佐いく子「仲間と育つ子ら」，青
木 一・碓井岑夫・大麻 南編『道徳教育実践の
探究』あゆみ出版，1990年，111-113頁）。

（2011年10月13日受付）

（2011年12月14日受理）